

一生ものの、書く力。



—平成二十八年度版『中学書写』のご紹介—

新版から編集委員として『中学書写』に参画された甲斐利恵子先生とともに、新しい教科書の「お薦めポイント」をご紹介します。

『中学書写』
ここが
ポイント！

一、書写力が
ぐんぐん伸びる！



ポイント1 身につける力が明解。
しかも、応用が利く。

学習で身につける力を「目標」―「学習を振り返る」に明記し、「学習の窓」には汎用性のあるポイントを示しました。

書写のねらいは、お手本の文字をそっくりに書き写すことではなく、一つの文字を書くことを通して、文字全般の書き方、整え方を身につけることにあります。

ここでは「木立」を例にして、行書における「点画の方向や形の変化」を学びます。特に、終筆の筆使いや筆を進める方向が変化しやすいとわかっていれば、これ以外の文字を行書で書くときにも応用が利きます。

（甲斐）

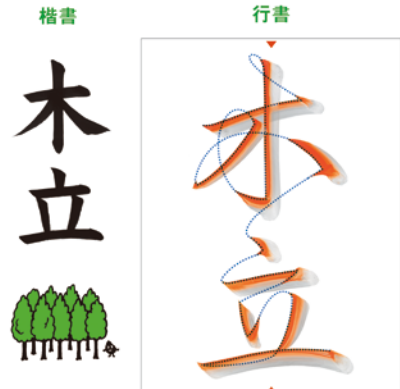
▼P26-27

1年生 点画の方向や形の変化



点画の方向や形の変化を理解して書く

- ① 楷書と比較し、点画の方向や形の違いを見つけよう。
- ② 線をなぞり、行書の点画の方向や形が楷書と異なる理由を考えよう。



【主な変化】

右払い	左払い	縦画	横画	点画	楷書との違い	行書との違い
ノ	㇏	丨	一	丶	楷書との違い	行書との違い
㇏	ノ	丨	一	丶	楷書との違い	行書との違い
文	犬	因	未			

点画の方向や形の変化

・終筆の筆使いが、次の点画に移りやすいよう変化する。
・点画の方向が、次の点画に移りやすいよう変化する。

毛筆で書こう。

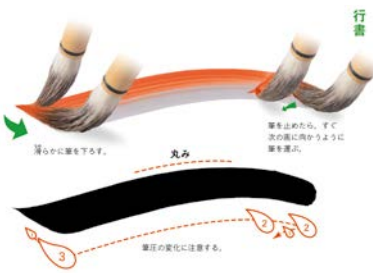
木立

天文 水分

30 行書の練習1

27

▼P23



ポイント2 「どうすれば」が
目に見える。

文字の書き方や、書くときの筆の動きを、図や写真で視覚的に示しました。

行書を書くときには、つながりの意識（筆脈）や、流れるような筆の動きが大切です。ただ、墨で書かれた「結果」だけ見ても「どうすれば」この線、この形が書けるのか、生徒には読み取れないんです。新版教科書では、書く過程の筆使いや穂先の動きを、朱墨や補助線、写真などで可視化しています。これなら生徒も、どうやって書いたのか再現できます。

（甲斐）

▼P10



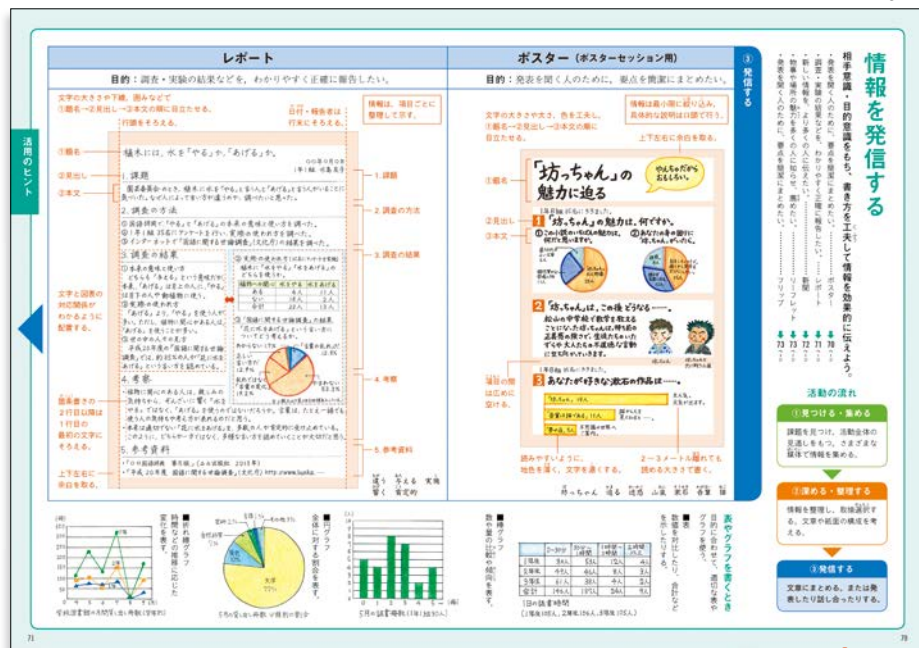
ポイント3 「学びを支える言葉」
で理解が深まる。

例えば「筆使い」や、「始筆・送筆・終筆」「筆圧」など、書写の学習用語を学ぶ場を積極的に設けました。

言葉はとても大事です。例えば、「伏線」という言葉を知っているかどうかで、文学の読み方自体、変わってきますよね。それと同じで、言葉があれば、それを観点にして自分の文字を客観的に分析・評価できるんです。課題がわかれば、自力で改善もできます。また、用語は先生方の指導語彙にもなります。ポイントを言葉で伝えられれば、闇雲に練習させるよりずっと効率よく上達します。「言葉」が技能の習得を支えるのです。

（甲斐）

▼ P70-71



イラスト…坂崎千春



ポイント
3
いつでも使える。
一生使える。

資料編を「日常の書式」「活用 of ヒント」「書写事典」に整理し、さらに充実させました。書写の授業はもちろん、他教科や国語にも役立つ資料が満載です。

学校生活の中で手紙やレポート、新聞などを書く機会はかなりあります。「日常の書式」「活用のヒント」には目的や相手に応じた文字の書き方が示されていて、とても便利です。また、「書写事典」の常用漢字一覧表(楷書・行書)や仮名の一覧は「今度」は行書で格好よく書いてみよう」なんて、生徒の発想自体、広がってきます。

「整った文字で書きたい」という思いは皆同じです。そのための具体的な手だてが、この一冊に詰まっています。

(甲斐)

国語で習った文章を流れるような行書で書けるなんて、うれしいですね。意味もわからない文章と比べたら、ずっとやる気も出るし、「言葉を書いてる」ことをしみじみ実感できると思います。

(甲斐)

例えば、「平家物語」の「鎭かざらは海へ入りければ……」は、生徒たちが暗唱できるくらい読み込む一節です。「季節のしおり」もそうですが、

文字の素材として、国語で学ぶ名文や古典の一節を積極的に取り入れました。

ポイント
2 親しみのある文章を
美しく書ける喜び。

文字を書くのは身近なことで、普段は意識することはありません。でも、この詩と文字の表情にふれ、自分と文字との関わりを少しでも思い起こしてくれるといいなと思います。意識をもって向き合うときに「出会い」です。自分が言葉や文字と関係を築き、文字文化を受け継ぐ主体であることに気づける、新鮮な導入になりました。

(甲斐)

(甲斐)

ポイント
1 文字を書くことの
価値を実感できる。

文字を書くことの価値に繰り返し気づけるよう、巻頭に「文字と出会う」を設けました。

『中学書写』
ここが
ポイント！

二、国語とつながる。
一生使える。



▼卷頭



▼ P48-49





先生も生徒も、わくわくしながら授業できる教科書。

港区立赤坂中学校主任教諭 甲斐利恵子

長く、中学校『国語』教科書の編集委員を務めてこられた甲斐利恵子先生。新版から、『中学書写』の編集委員としても活躍いただくことになりました。「自分と同じく、書写が専門ではない先生方の声も本作りに届けたい」とおっしゃる甲斐先生に、新しい教科書の魅力を伺いました。



——新版『中学書写』を手にしたときの、最初の印象はどうでしたか。

本当にいいものができたと思います。私はこれまで、「書写の教科書はお手本集だ」という先入観をもっていました。でも、新版教科書には身につける力がきちんと示されています。しかも、ページをめくるたびに、わくわくするような楽しさもありますね。これなら、書写を専門にしていない先生方も、安心して授業ができるはずです。

——先生方の安心感は、どこから来るの

ひと目でわかります。

また、特に見ていただきたいのが、原理・原則の説明のしかたです。私自身、「どうすれば整った文字が書けるか」を伝えるのに悪戦苦闘してきましたが、「こんなふうに表現すればいいのか」という言葉のヒントがちりばめられています。

——言葉のヒントですか。

はい。例えば、漢字の字形を整える観点の一つに「点や画の間」(P12)という言葉があります。こう言われると、「なるほど、字形を整えるためには、画の間の空間にまで注意するのか」と、はっきり意識できますよね。字形を整えるというゴールはわかっても、そのための留意点を伝えられず、もどかしい思いをする先生方もおられたと思います。私も一生懸命になればなるほど、「よく見て」「がんばって」「しっかり」なんて、根性論みたいな言葉しか出てこないこともあった(笑)。でも、ひと言「間」と言ったほうが生徒にもピンとくるし、それはや

る気にも直結すると思うんです。

——ちゃんと理解できることが、学習意欲に直結するということですね。

はい。「どうすればできるか」わからないままがんばるのは苦しいし、長続きしませんよね。たまたまうまく書いても充実感はないし、次にもつながりません。スポーツと同じで、「これができたからうまく書けた」「書けなかったのは、これができなかったからだ」と、自分を客観視できるかどうかのポイントです。

——次につながるポイントとして、新版では全教材に「学習の窓」を置きました。

国語教科書でも好評ですが、今回、書写にも位置づけました。国語での説明文の学習は、文章を理解するだけではなく、その経験を通して説明文全般の読み方を身につけることがねらいですが、これは書写も同じです。教科書に示された「緑」や「木立」という文字を美しく書くことではなく、それを通して整った文字が書けるようになることがねらいなんです。

光村の教科書には、「どうすれば」が目に見える形で示されています。



でしょう。

書写のねらいは、教科書に示された文字を上手に書けるようにすることではなく、「どうすれば整った文字が書けるか」という方法を知ることです。多くの先生方はそのことを理解されているし、そんな授業を目ざしています。ただ、「どうすれば」をうまく伝えられなくて悩まれているのではないのでしょうか。新しい教科書には、その「どうすれば」が目に見える形で示されています。

——「どうすれば」が目に見えると感じるのは、どんなところですか。

まず、どのページを開いても、右ページに原理・原則、左ページに教材文字という構成になっています。「何に気をつければいいのか」を最初に「理解」して、その上で実際に書くという学習の流れが、

「学習の窓」には、それを実現するための汎用性のあるポイントがわかりやすく示されています。

——生徒たちに、楽しく力をつけてもらえることを願っています。

生徒が楽しいと感じるのは、驚きや発見に出会う瞬間です。実は私自身も、教科書を開いて「へえっ」と思うことがたくさんありました。文字を整えて書く方法もそうですが、「文字の歴史を探る」(P20・21)など、文字文化にまつわるコラムも発見に満ちています。私たちのすぐそばに、こんなに魅力的な世界が広がっているなんて、わくわくしますよね。

生徒の「やる気スイッチ」をオンにする仕掛けが教科書の随所にあって、今から授業が楽しみです。

